

金持ちとラザロ

待降節第一主日を迎えました。会堂の中にアドベントクランツとポインセチアが置かれました。教会の暦では新しい年を迎えたことになります。まだ11月ですので新年といわれてもピンとこないかもしれません。ただわたくしはキリスト者として、この教会暦が指し示し、わたしたちを招く時間の捉え方を大切にしたいと思っています。考えてみれば時間とは不思議なもので、先週と今週のあいだにどう違いがあるのか、あるいは12月31日と1月1日のあいだで一年が変わりますね。「去年今年つらぬく棒のごときもの」という俳句はわたしたちが時間に特別な意味を与えて生きているようすを詠嘆したものだと思いますが、そういう時間の数え方、時の重ね方をする。これは太陽系のなかにある惑星の運行にかかわる観測データから導き出された時間の単位です。それは神さまから貸し与えられた時間としての命を生きるわたしたちをはかるスケール＝物差しでもあります。わたしたちが信じるのは天地万物を創造された神でありますから、この星をスケールとした時間も神さまからの贈り物と考えてよいでしょう。さらにキリスト者であるわたしたちは、イエス・キリストが来られたことによって歴史の意味が変わった。世界が終わりに向かって歩みはじめたということ意識して、キリスト以前とキリスト以後で時間の単位を変えました。これが西暦とよばれるキリスト教暦です。紀元前はキリスト以前、そして今年2021年は「主がともにいたもう年となって2021年目」という意味です。こうした時間の数え方の中に、一年をイエス・キリストの生涯にあわせて、降誕日、復活日、聖霊降臨日の3大祝日で区切り、降誕日の前の待降節＝アドベント、復活日の前の受難節、そして聖霊降臨節後の三位一体節をへて先週11月21日が教会暦の一年の終わり、終末主日でした。これは世界がやがて神によって完成される希望を言い

表しています。この日にわたしたちの教会ではリビングウィルをお渡しして、わたしたちの命が有限であり、神に向かって生きていることを確認しています。そして、本日から始まる教会暦の新年はこうして蠟燭に一本ずつ火を灯しながら世の闇を照らすまことの救い主を待ち望む。わたしたちの姿勢が、わたしたちのところに来てくださる方を待ち望むかたちに整えられているか、ふさわしい応答の姿勢を形作っているか、そのことをこそ、終末主日から、アドベントへと教会暦の新年に足を踏み入れたわたしたちはあらためて自分自身に問い直したいと思うのです。そして、その意味で今朝、わたしたちに与えられている「金持ちとラザロ」の物語は、この世に生きるわたしたちの応答の姿勢を問うものなのです。

さて、この金持ちとラザロの話は福音書記者ルカの特徴のよく出たエピソードです。ルカはじつに金持ちに厳しいですね。そして貧しい者や社会的弱者に優しい。それはルカがというよりも神がそうなのです。なぜなら金持ちは金を持っているがゆえにカネに頼る生活をし、神に頼らない。金を持つ自分を高くし、神を神としないからです。16章の「不正な管理人の譬え」の結びの箇所には「あなたがたは神と富とに仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるかどちらかである」というイエスさまの言葉があります。しかし、これにファリサイ派の人々が噛み付くのです。14節に「金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いてイエスをあざ笑った」とあります。今朝の「金持ちとラザロ」もこの彼らの反応に対して語られました。ちなみにラザロという名前の由来は「エレアザル」、こちらが本来の名前でジョンサンがジョンと愛称で呼ばれるような感じでしょうか。エレアザルの意味は「神に依り頼む者」という意味です。これはギリシア語を使う人達の間では知られたことでしたので、「金持ちとラザロ」というふうにならばすでにそこにメッセージがある。「金に依り頼む者と神に依

り頼む者」、これはそういう話なのです。ここはルカの筆の冴えが見られる箇所で、金持ちの豪華な生活ぶりやラザロの痛ましい姿がこれでもかと描かれます。まず紫の衣を着た金持ちというのは最上級の金持ちなのです。当時、紫は高貴な色で、貝で染めていたと言われ、非常に手間のかかるものです。麻布は下に来たものですが一分の隙きもないファッションに身を固めていたということです。そして日々宴会三昧、ぜいたくに遊び暮らしていた。「金に執着するファリサイ派」とルカで名指しされている彼らが、ここでの金持ちになぞらえられているのは間違いありませんが、おそらくそこには成功の神学のような考え方があったのです。つまり、富を得ることを神の祝福と考えるあり方です。自分は正しく神の道を歩んでいるからこのように祝福され、成功したのだ。一方、貧しい者は神に背いたからこのような境遇に甘んじることになったのだという考え方です。たしかに聖書の中には神に従う者は繁栄し、神に逆らう者は滅びるという考え方がありますから、自分の境遇から、自分は祝福された存在だと信じ込むことも可能であったでしょう。ファリサイ派の人々はそういうところに立っている。成功した自分の努力、人格を誇り、そうした立場で得た金を当然のものとする考え方です。しかし、彼らが恣意的に、敢えて見ないでいることがあります。それは聖書の教えには貧しい者への施しや、憐れみに生きることが書かれていることです。富める者が貧しい者を靴一足の値段で売り飛ばす社会となった時、イスラエルの預言者アモスは、この国は正義がないと富める者を糾弾し、神の裁きを告げています。またルカによる福音書 15 章の「見失った羊」でも示されましたように、100 匹の羊がいて、一匹がいなくなったら、神はその見失った一匹を探すために、九十九匹を残して、見つけ出しに行く。そして抱きかかえて帰られる方なのです。ここにはわたしたちが考える最大多数の幸福といったような考え方はありません。100%、一人も欠けてはなら

ない。失われてはならないという神のまったき愛が示されています。ルカはここまでも宴会の様子をご覧になったイエスさまが招待するホストに親兄弟や親類、友人、近所の金持ちを呼ぶのではなく、貧しい者、身体の不自由な人を招きなさいと勧めています。神はそのような人を呼んでおられると教えられたのです。それは、わたしたちの神が憐れみ深い方であるから、あなたがたも憐れみ深くありなさい、という神さまの本性に根ざす教えです。律法の世界です。しかし、成功の神学に酔うファリサイ派も金持ちもそこには目をつぶる。ラザロは金持ちの宴会に呼ばれることはなく、おこぼれを犬と取り合うような有り様で、見る影もない。しかし、それが死後、逆転したということが次に語られます。貧しさゆえに神に依り頼む以外のすべを持たなかったラザロは天の宴会の場で父祖アブラハムの近くの席へと招かれる。しかし、金持ちは陰府で炎の中で苦しんでいる。こういう逆転はエジプトの話にもあるそうです。仏教の説話にもありそうですね。地獄で苦しむ人の絵などが寺院の壁や天井に描かれていて、それを見せて悔い改めを迫るということがありました。終末主日は、魂の刈入れと思う日だと言いましたが、もしこの金持ちにリビングウィルを渡して、このあなたの一年、これまでの一生は神さまの前にどうでしたか、と問うたらどうだったでしょう。あなたはやがて神の前に立つ日が来ます。そのための備えをしていますか、ということですね。死んでからは、もうどうにもならないと金持ちから憐れんでくださいと頼まれたアブラハムは答えています。あなたとわたしの間には大きな淵がある。それを越えて来ることも行くことも出来ないというのです。そこで金持ちは別の願いをします。ならばラザロを自分の兄弟5人のところに遣わして、自分のようなことにならないように、よく言い聞かせて欲しいというのです。死んだ者が現れれば見て信じるだろうというのです。しかし、アブラハムはそれを拒絶します。そうはならないからです。自分中心の人間は

死んだ人間が生き返っても信じることはない。すべては神の言葉の中に、モーセの律法と預言者の言葉に明らかにされている。それ以上のものは既にないと突き放す。このことは救いに必要なことはすべて公開されているということです。神の言葉のなかにある福音に耳を傾けないならば、死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないのです。この結びの言葉をよく表すエピソードをルカは福音書の最後に記していますね。エマオのキリストです。イエス様が十字架で処刑されて意気消沈して暗い顔をしてエマオへと落ち延びてゆく弟子ふたりに復活されたイエスさまが道行きをともにし、どうしたのかと尋ねる。かくかくしかじか、とイエスのことを話す彼らに向かって、イエスさまは「ああ、物分りが悪く、心が鈍く、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずではなかったか」と述べて、モーセから始めて預言者まで、つまり律法と預言を通してご自身について解き明かされたところ、彼らの「心が燃えた」のです。そして食卓でパンを割かれるイエス様をみて真実を悟らされた。有名な箇所ですね。わたしたちは心が鈍く、さまざまなことに心が囚われているために復活の主がそこにおられても分からないのです。聴くことが先です。すでに律法と預言の中にキリストが指し示されている。そしてこの方が来て下さった。わたしたちのところに到来されたということのなかに救いははっきりと示されているのです。それは、越えてくることが出来ないと語られた陰府の深い淵をも復活の御業によって乗り越えて、救いへの道を指し示してくださる方の到来です。それほどまでに大きく、深い憐れみがキリストの誕生、そして十字架と復活によって示されたのです。だからわたしたちは時間の数え方を変えたのです。金持ちとラザロの譬えは、御言葉を通して神に依り頼んで生きる者に祝福を与え、自分の力を信じて生きる者には悔い改めを迫る。この時期にふさわしいわたしたちへ

の問いかけなのです。わたしたちの闇を照らす救い主の到来を共に待ち望みます。

お祈りいたします。